

令和8年3月23日

妊婦の皆さんとご家族へ

日本産科婦人科学会 理事長 万代 昌紀  
日本産婦人科医会 会長 石渡 勇  
日本産婦人科感染症学会 理事長 早川 智

RS ウイルス母子免疫ワクチン（アブリスボ<sup>®</sup>筋注用）の  
妊婦に対する定期接種化について

令和8年4月1日からRS ウイルス母子免疫ワクチン（アブリスボ<sup>®</sup>筋注用）が、妊娠28週0日から36週6日の妊婦に対して定期接種となることになりました。RS ウイルス感染症とはどのような疾患なのか、妊婦がワクチンを接種することのメリットと気かりは何なのか、これからお産を迎えるみなさんとご家族へ大切な情報をまとめました。

1. RS ウイルス感染症とは？：赤ちゃんにとっての脅威

RS ウイルスは、誰もが一生のうちに何度も感染するごく一般的なウイルスですが、生後数か月以内の赤ちゃんが感染すると大きな健康上のリスクとなりえます。

【重症化のリスク】赤ちゃんは気管支が細いため、炎症で呼吸困難（細気管支炎や肺炎）を起しやすく、入院が必要になるケースが少なくありません。国内のRS ウイルス感染症の発生数を推定したところ、2010年代の生後24か月未満の年間RS ウイルス感染症発生数は12万人～18万人（その内3万～5万人が入院）とされ、RS ウイルスによる2歳未満の入院症例のうち、7%が何らかの人工換気が必要とし、その約半数が6か月未満であったとされます。

【治療法】残念ながら、RS ウイルス自体を退治する特効薬はまだありません。入院しても、酸素吸入や点滴などの対症療法が中心となります。

2. 「母子免疫」という最初の贈りもの

RS ウイルス母子免疫ワクチンを、お母さんに接種することで体内に抗体を作り、それを胎盤経由で赤ちゃんにプレゼントする「母子免疫」という仕組みを利用しています。母子免疫については日本産科婦人科学会のホームページにわかりやすく解説した動画があるので、是非ご覧ください。（<https://www.jsog.or.jp/citizen/7042/>）

3. ワクチンの効果

RS ウイルス母子免疫ワクチン（アブリスボ<sup>®</sup>筋注用）は、妊婦さんに接種することで、お母さんの体で作られた抗体が赤ちゃんに移行し、生まれた後の赤ちゃんをRS ウイルス

- ・現状では経過措置として、母子健康手帳の任意記載事項様式に設けている「その他の予防接種」の欄にワクチン接種の記載がなされていることを確認してください。

#### 6. 産婦人科医以外の医師にワクチンを接種してもらう場合について

かかりつけの施設によっては、ワクチンを接種しないところもあります。その場合は、原則としてワクチンを接種できる産婦人科施設を紹介してもらうようにしてください。ただし、地域によっては産婦人科医以外の医師に接種をお願いする場合もあり得ます。その場合は、かかりつけ産婦人科医と相談して予診票を記入し、接種が可能かどうかをあらかじめ相談するようにしてください。

#### 参考資料

- ・第64回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会資料1-1
- ・Kampmann B, et al. N Engl J Med. 2023;388(16):1451-1464.
- ・Prenatal RSVpreF Vaccine Safety 2023–2024 Respiratory Season. The Vaccine Safety Datalink (VSD)
- ・Amélie Gabet, et al. Obstet Gynecol. 2026 Jan 1;147(1):118-126.
- ・Son M, et al. JAMA Netw Open. 2024 Jul 1;7(7):e2419268.
- ・厚生労働省ホームページ  
([https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/yobou-sesshu/vaccine/rs/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/yobou-sesshu/vaccine/rs/index.html))
- ・日本産科婦人科学会ホームページ (<https://www.jsog.or.jp/citizen/7042/>)  
母子免疫ワクチンに関する動画は下記 QR コードからご覧ください



＊ 感染から守るワクチンです。大規模な臨床試験では、次のような効果が確認されています。

**a. 重症\*のRSウイルス感染症による下気道感染症（肺炎・細気管支炎など）**

生後 0～90日：発症リスクを 81.8%減少

生後 0～180日：発症リスクを 69.4%減少

\* 重症とは医療機関へ受診を要する気道感染症を有するRSウイルス検査陽性の乳児で、多呼吸、SpO<sub>2</sub> 93%未満、高流量鼻カニューラまたは人工呼吸器の装着、4時間を超えるICUへの収容または無反応・意識不明のいずれかに該当と定義されます

**b. 医療機関の受診が必要なRSウイルス感染症による下気道感染症**

生後 0～90日：発症リスクを 57.1%減少

生後 0～180日：発症リスクを 51.3%減少

このように、妊娠中にワクチンを接種することで、生まれてから半年間の赤ちゃんのRSウイルス感染による呼吸器の病気を大きく減らす効果が示されています。

**4. ワクチンの安全性**

**1) よくみられる副反応について**

接種後にみられることがある主な副反応症状として、注射した部位の痛み、腫脹、紅斑、倦怠感（だるさ）、頭痛、筋肉痛がありますが、多くは数日以内に自然に軽快します。

**2) 早産について**

実臨床データでも安全性は継続して評価されていますが、早産リスクの明確な増加は示されないという報告がほとんどであることから、早産リスクは上昇しないと考えます。

**3) 妊娠高血圧症候群について**

臨床試験では、妊娠高血圧症候群が、ワクチンを接種したグループでわずかに多く報告されたという結果がありました。ただし、発生頻度は全体として低くワクチンが原因で起きたかどうかは明確ではないため、現時点ではワクチン接種と妊娠高血圧症候群の因果関係は明確には示されていません。日常の妊婦健診で、血圧や尿検査を定期的に確認しており、早期発見と適切な管理が可能と考えます。

そのほか、ワクチン接種群と非接種群を比較した際、赤ちゃんの健康状態に有意な悪化は認められず、全体として安全性は高いと結論付けられています。

**5. ワクチン接種情報の小児科医師との共有**

出生後の赤ちゃんのRSウイルス感染症の予防として抗体薬を投与する予防法もあります。赤ちゃんのリスクに応じて抗体薬の投与が小児科医師により検討される場合があります。小児科医師に母体へのワクチンの接種歴の有無を正確にお伝えすることが重要です。また定期接種になることで、予防接種済証を交付することとされていますが、今後、母子保健法に基づき交付された児の母子健康手帳に証明すべき事項を記載することにより母及び児の予防接種済証の交付に代えることが可能になるよう法令の整備が行われています。